

1945 年 4 月 1 日の沖縄県読谷村北西部の軍と住民： チビチリガマ，シムクガマの周辺

武島 良成

The US Military and Local Residents in Northwest Yomitan Village, Okinawa in April 1,
1945: In the Area of Tibitiri-gama, Shimuku-gama

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted April 6, 2016

抄録：本稿は、沖縄県読谷村を1つの「戦争遺跡」と捉え、1945年4月1日の同村北西部の軍と住民の様子を掘り下げるものである。その際、アメリカ軍の様子を掴むために、「米海兵隊太平洋戦争記録」の各種レポートを活用する。これらのレポートには、連隊・大隊のものが含まれており、かなり細かなレベルで隊の動きを追うことができる。また、『読谷村史』の編纂過程でつくられた調査ファイルも使う。それらを、既知の諸情報と突き合わせ、この日の読谷村北西部の様相を深めていく。

索引語：沖縄戦，チビチリガマ，シムクガマ，読谷村，平和教育，「戦争遺跡」

Abstract: This paper aims to investigate the conditions of the US military and local residents of the captured area northwest of Yomitan Village, Okinawa during the US invasion in April 1, 1945. To gain better understanding of the U S Armed Forces at that time, various reports from “Records of the US Marine Corps Pacific War” will be used as reference. These reports include information about the regiment and the battalion of the US army and troop movement of the US military in detail. In addition, investigation files made during the compilation of *Yomitansonshi* (The History of Yomitan Village) will be used. Furthermore, by comparing all these recorded evidences (i.e., reports and investigation files) with other already-known information, this paper will deepen the understanding of the situation on the said day in the Northwest area of Yomitan Village.

Key Words: battle of Okinawa, Yomitan Village, peace education, war-related site

1. はじめに

筆者は、2015 年の論稿「沖縄県座喜味城跡陣地の日本軍」〔武島 2015〕で、同城跡での日本軍の陣地づくりの様相や、住民との関わりについて分析した。それは、大学の授業のための下調べであると共に、八重瀬町立歴史民俗資料館（当時）の村山由生が危惧する、「戦争遺跡」が「詳しい調査が入る前に戦跡としての情報が不十分なまま平和学習で活用される」ことを防ぐための措置でもあった〔村山 2006: 13; 武島 2015: 28〕。それに続き、本稿では、1945 年 4 月 1 日（アメリカ軍の沖縄本島への本格的な上陸日）の読谷村（当時の読谷山村）北西部の、軍と住民の様子を検討する。

この日、読谷村北西部には第 6 海兵師団が上陸し、上陸点、チビチリガマ、シムクガマ、座喜味城跡、北飛行場などは、「戦争遺跡」・旧跡と見做されるようになっていった。『読谷村の戦跡めぐり（第 2 版）』は、同村の戦跡が 80 余箇所及ぶとしている〔読谷村史編集室 2004: 一〇〕。同書は、『読谷村史：第 5 巻資料編 4 戦時記録上巻・下巻』〔読谷村史編集委員会 2002; 2004〕（以下、『戦時記録』上・下と記す）の、いわばダイジェストである。本体である『戦時記録』は、様々な聞き取りの結果を収め、より幅広い情報を提供している。同書の水準は、部分的に村史の域を超えており、高く評価すべきものである。だが、著名な遺跡を除き、大部分の戦跡の情報はなお少ない。また、それらが相互にどのように結ばれ、関係づけられるのかも明瞭でない（例えば、次の点がわかりづらい：4 月 1 日の第 6 海兵師団の上陸地とガマや壕の関係、同日の集落や家族壕の様子、座喜味城跡の状況、残存していた日本軍との関係）。

省みるに、そもそも読谷村全体が戦域だったのだから、そこから特定の場所を「戦争遺跡」として切り出すのは無理がある。町並みや地形・自然を含めた村全体を、1 個の「戦争遺跡」として理解していく方が自然である。そう考えた上で、この日の読谷村について理解を深めるには、第 1 に、アメリカ軍の史料のさらなる活用が望まれる。『戦時記録』は、アメリカ陸軍省が編集した『沖縄戦』〔米国陸軍省 1997; アメリカ陸軍省戦史局 2011¹⁾〕などを使っているが、同書の読谷に関する記述は簡単なものである。第 4 海兵連隊が北飛行場（読谷飛行場）を占領したことを記してはいるが、読谷村西部の地名や師団名・連隊名などはほとんど出てこない。

アメリカ側の刊行物としては、海兵隊の半公的な戦史 *Okinawa*〔Nichols and Shaw 1955〕があり、まず同書を活用すべきである。とはいえ、同書も、第 6 海兵師団の担当地区の記述は、図や写真を除くと実質 1 頁に満たない〔66-68〕。基本的に、連隊レベルの動きをなぞったものであり、それ以上に詳しくはない（例えば、次のような話は載っていない：海兵隊が 4 月 1 日に宇座付近まで進んだこと、座喜味城跡の南東麓で戦闘があったこと、都屋集落を午前中に制圧したこと、日本機が突然着陸したこと）。より正確で詳しい情報を得るには、原史料の渉猟が必要になる。

幸い、アメリカの海兵隊歴史センター旧蔵「米海兵隊太平洋戦争記録」のマイクロフィッシュが、日本の国立国会図書館憲政資料室に収められている²⁾。その中に、この戦域に関わる第 6 海兵師団と、隷下の第 4・22・29 海兵連隊、その他の部隊のレポートがある。これらは 1945 年 5 月前半に調製されたものである。連隊のレポートには、大隊のレポートが収録されていることも多く、かなり細かく、米軍の行動や、時には住民の被害を読み取ることができる（末尾の「米海兵隊太平洋戦争記録」を参照）。本稿ではこれらを使用していく。

第 2 に、『戦時記録』下が載せている「戦災実態調査」〔225, 245 など〕の調査段階のファイル（「戦災実態調査綴り」）の活用である。『戦時記録』は、編纂に際して、各集落で悉皆的な「戦災実態調査」

を行った（以下、その集計結果を「捕虜一覧表」「犠牲者一覧」と記す）。ただ、調査量の多さに対して、刊行物に直接活かされている部分は限られる。より幅広く、また継続的に活用することで、得られるものは多いはずである。

その際、「戦災実態調査」の数字には吟味が必要となる。というのも、「捕虜一覧表」によると、例えば、都屋の（4 月）1 日は 16（人）となっている。しかし、筆者が、「戦災実態調査綴り 都屋」（以下、「都屋」などと記す、その一覧は末尾の「戦災実態調査綴り」の字別ファイル）を参照）に目を通したところ、4 月 1 日に都屋で捕虜になった者は 1 人も見出せなかった。4 月 1 日で読み取れたのは、長浜のカンジャーヤガマで捕虜になった 3 家族（16-24 人）と、漢那（現宜野座村）で捕虜になった 1 家族（6-10 人）だった（人数に幅を持たせたのは、後からファイルに書き込まれた者がいるため³⁾）。この中で、4 月 1 日に漢那で捕虜になったというのは、地理的に信じ難い。「戦災実態調査」も、そのように判断して、長浜での捕虜の数字だけを残し、16 人としたと見られる。だが、それは都屋の外での、しかも推測を交えた数字なのである。それに、長浜周辺のガマが 4 月 1 日に制圧されたというのも疑わしい（後述）。このように、「捕虜一覧表」「犠牲者一覧」の数字は、そのまま実数と見なし得るものではないのである。

以上の状況を受け、本稿では、読谷村史編集室が保管するこれらの調査ファイルを、内容を吟味しながら使用する。その際、個人情報に配慮し、刊行物で出ていない人名は、アルファベットの略称で示すことにする。名前に読み間違いがあり得ることも断っておく。

史料については、他に、『沖縄県史：資料編 12（沖縄戦 5）』[沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 2001] が収める、アメリカ第 10 軍の作戦計画も利用する。この中の 1945 年 2 月 13 日・2 月 27 日付けの「攻撃目標リスト」「補足攻撃目標リスト」（以下、「アイスバーグ目標」で統一）、付録の 1 万分の 1 地図（以下、「アイスバーグ地図」⁴⁾）と記す）なども、米軍の行動を理解するのに有用である。また、作戦に加わった米兵たちのインタビュー記録 [Homan Lacey 2005] も、一部で活用する。他に、アジア歴史資料センター (JACAR) のデータベースなども使う。字誌や個人の回想記も可能な限り活用する。そうして、読谷村という 1 つの「戦争遺跡」の実態解明を進めることを目指す⁵⁾。

以下、「2」・「3」・「4」で、第 6 海兵師団が上陸・侵攻した読谷村北西部の 4 月 1 日の状況を追う。第 1 海兵師団が上陸した村の南西部（当時の楚辺、伊良皆など）については、誌面の都合により、今回は扱わない。「2」では、海兵隊の最左翼の上陸点である「グリーン 1」⁶⁾（「むら咲むら」の西側の浜辺）、チビチリガマ、長浜などの一帯を見る。「3」では、左翼から 2 つ目の上陸点である「グリーン 2」（都屋集落の北西の浜辺）や、シムクガマ、波平集落、座喜味城跡などの一帯を見る。第 6 海兵師団による集落・住民の「掃討」は、主にこの地区でなされたので、記述が長くなることを断っておく。「4」では、「レッド 1」「レッド 2」「レッド 3」（都屋集落の南東の浜辺）や、北飛行場の一帯を見る。そして、「5」で、全体のまとめをする。

それぞれの浜辺に最初に上陸した大隊については、Okinawa が図示している。ただ、細かな上陸時刻やその後のルートなどは記していないので、各章ではそこから稿を起こす。なお、話の空間的把握を容易にするため、図 1・2 を付けた。適宜参照されたい。それから、文献一覧や史料情報は、次稿と合わせ、44-46 頁にまとめた。

図1 第6海兵師団・上陸状況（4月1日午前）

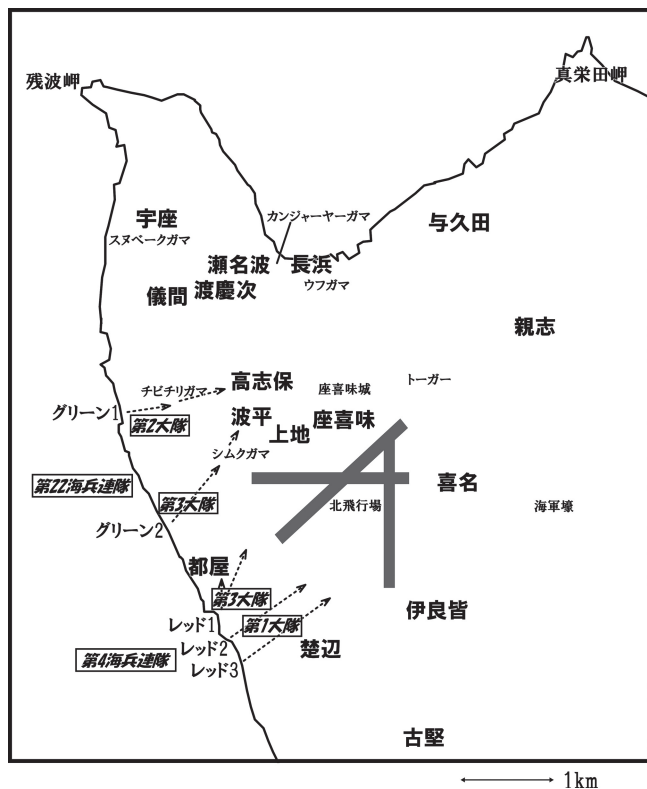
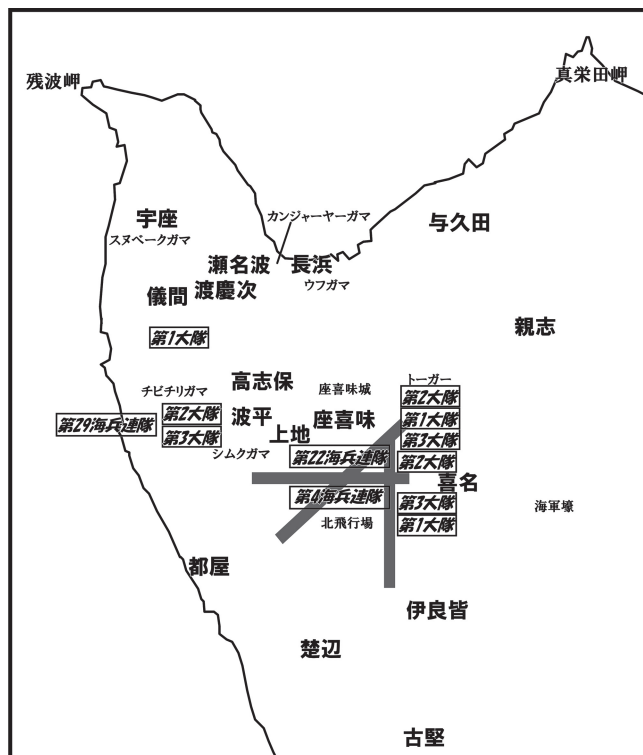


図2 第6海兵師団・進出状況（4月1日夕方）



2. 「グリーン1」からチビチリガマ，残波岬方面へ

① チビチリガマまで

「グリーン1」には、第22海兵連隊第2大隊（大隊の定員は約1000人）が、朝8時37分から上陸した〔第6海兵師団司令部 1945: VII-1〕。グリーン1の南側の崖上には、日本軍のトーチカがあった（「アイスバーグ地図」，「アイスバーグ目標」，〔読谷村史編集室 2004: 105〕）。『沖縄方面陸軍作戦』は、独立歩兵第12大隊第2中隊の第1小隊（小隊の定員は50-60人程度）の一部が座喜味西方海岸にいたとしており〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 273〕，この一帯の守備を担当していたことになる。だが，「第62師団戦闘経過要図」によると，このトーチカには守備兵を置いていなかったことになる〔C11110060700⁷⁾〕。

「第6海兵師団司令部レポート」「第22海兵連隊本部レポート」などにも，海岸で発砲や抵抗がなされたという記事はない〔第6海兵師団司令部 1945; 第22海兵連隊本部 1945〕。第22海兵連隊2大隊G中隊のチェイソンも，匍匐せず立って進んだと述べている〔Homan Lacey 2005: 46〕。第22海兵連隊2大隊E中隊のフィッツジェラルドも，浜で抵抗が全くなく，重い障害物もなく，嫌な煙を立てられた（“some enemy smoke, harassing stuff”）と述べている⁸⁾。

「グリーン1」から崖を少し登り，真っ直ぐ東に進むと，800-900メートルでチビチリガマに至る。チビチリガマに避難していた上原進助は，米軍との最初の接触を，9時頃のことと記している（『戦時記録』下：480）。米軍は上陸後も順調に進軍し，ガマに至ったことになる。第2海兵連隊2大隊L

中隊のナイランドは、（上陸後も）ほとんど抵抗がなかったと述べているが [Homan Lacey 2005: 52]、非常にスムーズに進んだことになる。

この後、チビチリガマで起こった出来事を、下嶋哲朗の研究に従って略述すると、以下のようになる [1991; 1992; 2000; 2010a; 2010b]。砲撃（艦砲・ロケット弾）が収まったので、知花カマドーが入り口付近で七輪に火を起こそうとした。崖の上に米兵を見つけたので、ガマに逃げ込んだ。米兵は入り口まで降りてきて、「デテコイ」と叫び、やがて去った。ガマの中はパニックになったが、上地春の呼び掛けにより、多数が竹槍を持ってガマを出た。崖の上の米兵に竹槍を突き出したところ、機関銃や手榴弾を浴びせられ、先頭の 2 人の男が重傷を負った。住民たちは、この 2 人を引きずってガマに戻った。

間もなく、米兵は懐中電灯を持って入って来て、「デテコイ」と叫んだ。やがて、ビラや食べ物置いて帰っていった。住民はそれを食べず、やがて「サイパン帰りの男」、もしくは元日本兵（傷痕軍人）が自決を呼び掛け、ガマの中で蒲団に火をつけた。だが、主婦たちが身を挺して消火した。そして、生死をめぐって口論が続いた。

米軍は、この日はこれ以上チビチリガマに深入りしなかった。「アイスバーグ目標」には、チビチリガマの南に長さ 250 ヤード（約 230 メートル）の塹壕が載っている。米軍としては、この陣地の方が気がかりだったはずである。しかも、チビチリガマ周辺の塹壕には、実際に日本兵がいた。「第 62 師団戦闘経過要図」は、ガマの付近に、独立歩兵第 12 大隊の兵士（小隊の一部なので、多くても数十人）が配備されていたことを記している。ガマに隠れていた比嘉シズも、3 月 31 日の夜に、ガマの上で軍歌を歌っていた兵士たちがいたと述べている（『戦時記録』上：484-485）。前記のように、第 22 海兵連隊 2 大隊 E 中隊のフィッツジェラルドは、上陸時に日本側が煙を出したと述べているが [Homan Lacey 2005: 47]、これも彼らの行為かもしれない。

陸上自衛官の谷田進が、1970 年代にまとめた「“沖縄” 島袋地区における賀谷支隊の遅滞戦闘」からすると、この一帯（もしくは「3」で見る波平付近）で小規模な陣地戦があったことになる。そして、小隊長の北原秀雄中尉が戦死し、隊は散り散りになった。ただ、全滅したわけではなく、兵士たちは喜名の東方山地（倉岳）で再集結することになった⁹⁾。

② 残波岬方面の様子

第 22 海兵連隊第 2 大隊は、日本軍のことを気にしながら、チビチリガマの南隣のイングェーガマも覗いたはずである。ここでは住民 30 人が捕虜になったという¹⁰⁾。さらに、東進を続けて高志保に入り、そこから南下して波平に向かった¹¹⁾。米軍では、連隊予備として、「グリーン 1」と「グリーン 2」に遅れて上陸した第 1 大隊が、第 2 大隊と第 3 大隊（後述するように座喜味城跡に南から迫った）の間に占位した [第 22 海兵連隊第 1 大隊 1945: 4]。この 3 つの大隊が、北・西・南から波平を制圧したことになる。

ただ、Okinawa は、“critical left” という言葉を使い、上陸軍の最左翼が手薄になったと捉えている [Nichols and Shaw 1955: 68]。「第 22 海兵連隊本部レポート」も、第 22 海兵連隊の第 1 大隊の 2 個中隊を呼び戻して、補強することになったとしている [第 22 海兵連隊本部 1945: 8]。その後、第 29 海兵連隊第 1 大隊が、14 時 45 分（あるいは 15 時）に「グリーン 1」に上陸した¹²⁾。同連隊は、17 時に第 22 海兵連隊と連絡を付けることに成功した。こうして、「危機」は解消されたのだった。

第 29 海兵連隊第 1 大隊は、より北方の情勢も探った。同大隊の偵察隊が、残波岬まで 500 ヤード（約

460メートル)に迫ったというので〔第29海兵連隊第1大隊 1945: 8〕, 渡慶次・宇座まで進んだことになる。実際, チビチリガマのすぐ北の自然洞窟(アメーン壕)にいた照屋秀堅は次のような談話を残している。1日の夕方に静かになったので, 外に出てみたところ, 戦車に遭遇し, 威嚇射撃の破片が, 同行した老人に当たった。一旦アメーン壕に戻り, 夜になって1人で出て農林学校(現嘉手納町にあった)に向かった。だが, 米軍に撃たれて, そのまま走って山を越え, 親志に至った(『戦時記録』下: 987-988)。話の中の「戦車」は, 何らかの軍用車両の見間違いだろう。ともあれ, 住民は, このように第29海兵連隊と接触したのである。

また, 渡慶次では, 残った住民が, 集落の中央にある巨大なガマやその他の壕に隠れていた。同地では, 3月末から4月1日まで, 住民の捕虜は(はっきりとは)記録されていない¹³⁾。既に米軍のフロッグマン(水中工作員)が上陸・通過していた可能性もあるが(後述), 本格的に集落を制圧する状況ではなかったと見られる。

ところで, 以上の海兵隊のレポートには出てこないが, 『戦時記録』上[158-159]が指摘するように, 長浜(あるいは宇座)には, 3月30日頃から, 米兵の一部が上陸・侵入していた。例えば, 長浜真長は, 30日頃に真栄田岬(長浜の東方)で米兵を見たと思想している。長浜は, この米兵が残波で舟艇から網を投げて上がったと, 戦後アメリカ側に聞いたということである。31日に, 与久田ビーチの近くの壕を出た際にも, 米兵に遭遇したのだという(『戦時記録』下: 957-958)。また, 松田光政も, 3月31日の夜に, 20-30人の米兵が座喜味川・長浜川を渡るのを見たという〔高志保宇誌編集委員会 2007: 763〕。この他, 「宇座1」にも, 3月末に長浜にアメリカ軍がいたので引き返したYの談話が載っている。

これらの地区で, 3月段階で捕虜になったという話もある。例えば, 「宇座1」には, 同地での3例—S一家(6人), Y一家(3人), Y一家(10人か), 儀間での1例—Y一家(8人か), 真栄田での1例—K一家(7人か)が載っている。また, 「宇座1」などには, 3月末や4月1日に住民を捕虜にしたという話も載っている。長浜でも, 仲村渠マカトが, 4月1日に米兵に「デテコイ」と言われてガマ(ウフガマか)を出たと語っている(『戦時記録』上: 190)。そして, 住民は海岸近くの屋号長門に集められたという。

ただ, 上で見たように, 海兵隊の偵察隊が宇座まで進んだのは, 1日の夕方近くのことだった。残波岬の占領は, 翌2日の午前11時25分であり, 長浜には同日, 第6偵察中隊が派遣され, 偵察任務を果たした上で, 日没前に波平方面に帰還した〔第29連隊第1大隊 1945: 8; 第6師団司令部 1945: VII+48; Nichols and Shaw 1955: 70〕。このような動きからすると, 4月1日までの活動は, 本隊ではなくフロッグマンによるものだったことになる。彼らの任務は, 水中の障害物の除去であり, 海兵隊のレポートも, 地上を制圧したものとしては位置づけていない。「宇座2」には, 捕虜の多くが2日に取られたという情報も載っており, 制圧は2日後のことと見るべきだろう。

なお, 『戦時記録』下は, フロッグマンを水中写真測量隊と説明している[158-159]。同隊については, *History of United States Naval Operations in World War II*や *Okinawa* が, 北・中飛行場沖合での活動を詳述している〔Morison 1961: 134-137; Nichols and Shaw 1955: 45-46〕。ただ, 長浜周辺での活動については触れていない。同方面での活動については, 今後, 史料の発掘とともに, 継続的な分析が望まれる。

3. 「グリーン 2」から座喜味城跡付近へ

① シムクガマまで

左翼から 2 つ目の「グリーン 2」には、8 時 29 分から第 22 海兵連隊第 3 大隊が上陸した〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 8〕。米軍は事前偵察で、海岸にトーチカ 3 つと塹壕があることを予測していた（「アイスバーグ地図」, 「アイスバーグ目標」）。また、海岸の右手（南方）に機関銃が 2 丁あることも想定していた。先の「第 62 師団戦闘経過要図」によると、日本は実際にこの地に兵員を配置していた。だが、海兵隊のレポートには、抵抗はなかったと書かれている〔海兵第 22 連隊本部 1945: 8〕〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 6〕。注 9) で見たように、日本軍は早期に退却したのだろう。また、9 時には、第 6 戦車大隊の B 中隊の戦車 16 両が揚陸された〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 6; 第 6 戦車大隊 1945: 15〕。10 時 15 分までに、このうち 15 両が動ける状態になった〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 6〕。

第 3 大隊は、ヒル 400（座喜味城跡）の占領を命じられ、戦車中隊と共に内陸に向かった〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 6〕。彼らは、その途中、正面に対戦車壕があり、右手にはトーチカがあることを予測していた。部隊はそれらを警戒しながら進んだが、特に抵抗はなかった。そして、間もなく波平集落の南側（海岸から 1100 メートルの辺り）のシムクガマに至った。ガマに隠れていた又吉ヨシは、昼近くに戦車が来たと述べており（『戦時記録』下: 897）、この時の姿を目撃したことになる。

米軍は、シムクガマの後方（東側）に、2 つの機関銃陣地（それぞれ 2 丁ずつ）の存在を想定し、その奥にも、機関銃陣地（4 丁）、高射砲陣地（6 門）などを想定していた（「アイスバーグ地図」, 「アイスバーグ目標」）。下嶋哲朗『沖縄・チビチリガマの“集団自決”』では、シムクガマの入り口を警戒団員が見張っていたが、4 月 1 日の朝に、砲撃で 1 人が死んだとしている。同書は、上空を米軍の偵察機が飛び、着弾点を修正しながら砲撃がなされたとしている。ガマに入っていた比嘉三七も、（入り口で）砲弾が炸裂して 4 人が死んだと述べている¹⁴⁾。米軍は、シムクガマの周辺を重点的に砲撃（艦砲・ロケット弾）したのだろう。

この後のシムクガマの様子を、下嶋の著作などにもとづいて再現しておく。米軍はガマに着くと、4-5 人が、崖から飛び降り、「デテコイ」などと叫んだ。住民たちが戸惑う中、米兵は中に入った。それに対し、ガマの奥から、数十人の少年の警戒団員が竹槍を持って突撃しようとした。ハワイ帰りの比嘉平治が竹槍を捨てると怒鳴り、少年たちは竹槍を捨てた。米兵はビラと食べ物を置いて出て行った。

自決にこだわる約 50 人の住民は、毒薬で死のうと奥に入っていた。比嘉平治と叔父の平三は、ガマから出て米兵と話をし、殺さないという約束を得てガマに戻った。住民たちは、比嘉に応じてガマから出た。米兵は辺り一面にタコツボを掘り、機関銃を向けていたが、住民たちを受け入れた。比嘉は、すぐ東方のアガリシムクにも呼び掛けに行き、20-80 人が投降したという¹⁵⁾。その東のキジムナーガマからは、5-6 世帯が逃げ出した。その中に、山を越えた親志辺りで死んだ者がいたという（『戦時記録』上: 144）。その一方で、「波平 2」が記す T 一家（7 人）のように、捕虜になった者もいた。

なお、『戦時記録』下が載せる、「捕虜一覧表」によると、シムクガマを 1 日に出た者が 410 人、2 日が 31 人、「4 月とだけ記載があるもの」が 95 人、「月日の記載がないもの」が 211 人だという [245]。これらの数字を合計すると 747 人になる。その際、下嶋が、4 月 7 日に 50 人が出たとしているように [1991: 171]、シムクガマからの脱出は、一斉になされたわけではなかった。「波平 1-3」にも、3 日に捕虜になった K 一家（3 人）、5-6 日に捕虜になった T 一家（8 人）、7 日に捕虜になった H 一家（5

人か)などの情報が載っている。

② 波平から座喜味城跡へ

第22海兵連隊の第2陣として、第1大隊が「グリーン1」と「グリーン2」に分かれて上陸した。そして、先の第2大隊と、第3大隊の中間を進んだ〔第22海兵連隊第1大隊 1945: 4〕。第2大隊は高志保を経て北から、第3大隊は南西から波平に入り、第1大隊は、その中間から向かったことになる。ただ、先に触れたように、第1大隊のうち2個中隊は、残波岬方面に備えるために呼び戻された。また、集落の道が狭かったため、第3大隊に同行していた戦車は停止し、分かれることになった〔戦車第6大隊 1945: 15〕。

第3大隊はそのまま先行し、(座喜味集落を経て)城跡に南から迫った〔第22海兵連隊第3大隊 1945: 8〕。そして、「砲撃¹⁶⁾」を浴びながらも16時20分に城跡の占領を報じた。ところが、その直後の17時15分に、谷間(城跡の南東麓¹⁷⁾)に隠れていた日本軍に遭遇し、初の本格的な銃撃戦をした。この時に、カムリ中佐が負傷した。この戦闘は、途中から、第4海兵連隊の第3大隊に任された。第22海兵連隊第3大隊は、4月1日の日本兵殺害を5人と報じている〔第22海兵連隊第3大隊 1945: 23〕。この種の報告としては数が少ないので、比較的早期に戦闘を譲ったことになる。

第22海兵連隊第3大隊は東進を続け、17時30分に、C-2のライン(城跡の東方の山塊の切れ目)を確保した¹⁸⁾。第2大隊や、第1大隊の1個中隊は、もう少し早く、17時にC-2のラインに達していた〔第22海兵連隊本部 1945: 8〕。第3大隊のC-2到着が遅れたのは、戦闘をしたためだったろう。なお、翌2日の配置からして、もともと北側を進んでいた第2大隊が、北に占位し続けていたことになる。また、波平の警備は、15時35分に「グリーン2」に上陸した第29海兵連隊の本隊が、集落の南西方まで進み、受け継いでいた〔第29海兵連隊本部 1945: 1〕。

さて、座喜味城跡の南東麓の戦闘だが、日本の公刊戦史は、独立歩兵第12大隊第2中隊の第1小隊が「座喜味地区」で、第56飛行場大隊の警備中隊が「座喜味高地」で戦ったとしている。また、「座喜味東方高地」にいた第2中隊の第2小隊は、220高地(現沖縄市、うるま市、恩納村の境界)に撤退したとする〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 273-275〕。

この中で第1小隊は、注9)で見たように、実際には座喜味にとどまらなかった。『鉄の暴風』も、警備中隊と独立歩兵が連携しなかったように記述している〔沖縄タイムス社 1978: 67〕。警備中隊は、単独で戦ったことになる。その人数だが、所属する第56飛行場大隊の総員が370人と記録されている〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 269〕。同大隊の「兄弟部隊」の第44飛行場大隊では、390人のうち184人が警備中隊だったというので〔飯田 1992: 18〕、第56大隊もそれぐらいだったはずである。

この戦闘は、『沖縄戦』〔アメリカ陸軍戦史局 2011〕や、*Okinawa*〔Nichols and Shaw 1955〕には記されていない。だが、「第22海兵連隊第3大隊レポート」が比較的詳しく記しており〔第22海兵連隊第3大隊 1945: 8〕、第4海兵連隊第3大隊が、多数の日本兵を殺害した、あるエリアではマシンガンで19人を殺したなどと、2日朝に報じたとしている。日本の公刊戦史も、中隊長の小針三尚中尉が戦死し、隊はほぼ全滅したとしている〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 274-275〕。このように、4月1日にも激しい近接戦闘があったのである。

なお、この日の午後まで、もう少し北方のトーガー周辺には、飛行場大隊の本部(大隊長は黒沢厳少佐)や整備中隊、補給中隊、住民を根こそぎ動員した防衛隊などが残っていた。彼らは、喜名東方の海軍壕に向けて、随時移動した〔沖縄タイムス社 1978: 67-68; 座喜味 2001: 138; 松本 2012: 28-34〕。

警備中隊の抵抗は、結果的に大隊の退却の時間稼ぎになった。

③ 「掃討」された住民たち—波平・高志保・上地

以上の戦闘と並行して、米軍は各集落の「掃討」を進めた。そして、チビチリガマやシムクガマに入らず、家族壕などに隠れていた住民をも捕虜にしていた。主に波平を「掃討」したと見られる第 22 海兵連隊第 1 大隊は、1 日には、日本兵 2 人を殺し、59 人の住民を集めたと報じている [海兵第 22 連隊第 1 大隊 1945: 4]。

これに対して、『戦時記録』下の「捕虜一覧表」によると、4 月 1 日の「波平」は 128 人が捕虜になったという [245]。また、「座喜味」について、『戦時記録』下は、1 日の捕虜を 40 人としている [245]。さらに、「掃討」時の犠牲について、「犠牲者一覧」は、1 日の「波平」は 30 人、「座喜味」は 19 人としている [225]。ただ、これらの数字は、基本的に元の居住地に対応したものだし、高志保などの数字がどう扱われているのかという問題もある。以下、この件を筆者なりに検討していく。

筆者が、「波平 1-4」で、1 日に波平集落で捕虜になったことを読み取ったのは、次の各例である。集落北部の家族壕にいた T 一家 (6 人)、親戚の壕にいた H 一家 (4 人)、集落中央の前ヌ前宇座の壕にいた T 一家 (6 人)、集落北部の家族壕にいた H 一家 (4-7 人)、石根の壕にいた T 一家 (3 人)、軍が造った壕にいた K 一家 (7-9 人)、集落西部の家族壕にいた M 一家 (8 人)、集落西部の家族壕にいた K 一家 (4 人)、前ヌ前宇座の東の軍が造った壕にいた T 一家 (7 人)、防空壕にいた O 一家 (5 人—もう 1 人はそこで死亡)、東部の家族壕にいた T 一家 (7 人)、集落やや南部の家族壕で T が射殺されて、捕虜になったその長女。

また、1 日の話だったかどうか断定はできないが、シムクガマの近くの日本軍が造った壕にいた喜友名タケの談話も知られる。喜友名は、「アメリカ人が「みんな出なさい、出なさい」と言ったので壕から出ました」と述べている [喜友名 1990: 35]。

それから、死傷者については、上記の他に、「波平 1」に、波平で「直接戦闘」で死亡した某 (苗字不明) が、「波平 2」には、波平で「戦死」した区の書記の記事がある。また、「波平 4」は、集落東部の家族壕にいた H (比嘉) 一家が、夜に逃げようとした時のことを記している。2 人の女性は股・腰を撃たれ、後者の女性は死亡したのだという。『戦時記録』上は、生き残った比嘉トミの談話を載せているが、それによると、父が重傷、トミも脚に銃創を負い、同行した義父は窪地に転落したという [475-476]。結局、一家は家族壕に戻ったが、その隣の前ヌ前宇座の家族壕では、2 家族・4 人が手榴弾で集団自決した。この 4 人の名は「波平 1-2」で確認できる。比嘉トミによると、一緒に死のうとしたが、先に死なれてしまったのだという。それで、一家は毒を吞んだが、結局死ねなかったという¹⁹⁾。他に、「波平 2」にも、T 一家 (4 人) が波平で「集団自決」したという情報が載っている。また、『戦時記録』上が載せる、1 日朝に死亡した波平の T [145]、同下が載せる、1 日夜に射殺された与那覇吉秋の姉 [763, 851] も、ここであげておく。前者は食糧を求めようとして、後者は家族と合流するために、シムクガマに向かっていたのだという。

次に、高志保集落だが、最初に捕虜になったのは、注 11) で触れた比嘉武治たちだった。比嘉は、西の畑から米軍が来るのをガジュマルに登って目撃し、慌てて家族壕に逃げ込んだ。壕の入り口を畳で塞いだが、米兵は畳を取り払い、銃を構えて「デテコイ」と言ったという。この時に、近くで見つかった者が、まとめて都屋に連れていかれた [高志保字誌編集委員会 2007: 779]。また、「高志保 2-3」には、1 日の捕虜として、以下の家族が記されている。東部の後比嘉の家族壕にいた T 一家 (8

人²⁰⁾),そこに隣接する家族壕にいたT一家(2人),そこから山に逃げて捕らえられたH一家(6人)―1人は行方不明になり,1人は銃撃で負傷,集落東方の後仲門にいたN一家(5人)と,そこにいた他の3家族・5人―彼らは,「デテコイ」と言われて捕虜になったという。

この他,上地集落については,疎開しなかった住民の多くは,座喜味城跡周辺の山中に移動していた。そこでの状況は次に見る。他方,集落北部の壕に残った2人(HとT)は行方不明になった(『戦時記録』上:133)。

④「掃討」された住民たち―座喜味と城跡の周辺

次に,座喜味集落だが,「座喜味1-3」に,永毛の壕にいたT一家(3人),ハワイ帰りのN一家(6人),ミーカンコーにいたU一家(1人)とT一家(10人),Y(1人),H一家(9人か),エー川の壕にいたU一家(3人),フチサの壕にいたM一家(8人)とT一家(3人)とM一家(2人)が捕虜になったという記事がある。フチサのT一家では,捕虜になる直前,1人が壕内で病死したという。フチサでは,3世帯(3人以上)が銃撃され,捕虜になって収容所で死亡したという。この他,「座喜味1」によると,T一家(5人)に死者があったということだが,「住民の戦闘体験1」(読谷村史編集室蔵)は,生き残ったTの談話を収めている。それによると,1日夜の脱出時に父が撃たれ(即死),後の4人は喜名まで逃げたという。

また,「座喜味戦争体験談(33本分)」(読谷村史編集室蔵)には,永毛の近くのクシンダカリ壕に隠れていたKの談話が収められている。同壕には多くの住民が隠れており,1日夜に5世帯が脱出したが,毛川の少女は撃たれて死んだという。この他,日付けがはっきりと書かれていないが,マチョーにいたI一家(7-8人),ミーカー壕にいたM一家(5人),T一家(3人)らの中に,1日に捕虜になった者が含まれている可能性がある。

以上の,集落内に隠れた者に対し,座喜味城跡周辺の山中に身を潜めた者もいた。特に,城跡裏(北)の横穴(ナカブク)付近に,多くの住民が隠れていた。座喜味から避難した山内一家(6人―「座喜味3」による)の山内英幸によると,米軍に声を掛けられて投降し,その後米兵に話をつけて,兄たちがいた壕にも行ったという。そして,約10人が投降に応じたが,次の壕の人たちは,逃げてしまったということである(『戦時記録』下:501-502)。山内は語っていないが,「座喜味3」によると,この時にT一家(3人)が機関銃で撃たれて死亡したという。

この時にナカブクで捕虜になったのは,上地や高志保の住民が多かった。「上地 長田 牧原」には,T一家(7人),S一家(7人),A一家(3人)がナカブクで捕虜になったという記事がある。その際,Aの妻は機関銃で負傷したという。また,「高志保2」には,M一家(9人),H一家(5人)が同地で捕虜になったという記事がある。他に,松田光政ら(2人)は,ハワイ帰りの老人が米兵を連れてきたと語っている[高志保字誌編集委員会 2007: 764]。

この他,「上地 長田 牧原」には,1日に座喜味の東のフンジャー山で捕虜になったY一家(6人か9人)の話が出てくる。「座喜味2-3」には,座喜味後方の森で捕虜になったT一家(7人か),城跡の東のスクメーバンタの壕で捕らえられたH一家(4人)の情報が載っている(ただし前者は日付け不明)。「高志保1」には,N一家(5人)とO一家(2人)が,1日に同時に「長浜多幸山」で捕虜になったという話がある。これもナカブクの近くだった可能性がある。以上の他,場所が不明だが,「座喜味2」には,Tが村内で1日に負傷したという話が,「高志保3」には,Kが村内で砲弾で死亡したという話が載っている。

以上、住民の「掃討」の様子を見た。人数の件を含めて、その総括は「5」で行う。

4. 「レッド」から北飛行場へ

① 上陸と都屋の占領

第22海兵連隊の南東側は、海兵第4連隊が担当した。同連隊の上陸場所は、北から南にかけて、「レッド1」「レッド2」「レッド3」と名づけられ、それぞれ第3大隊、第1大隊、第1大隊が上陸した〔海兵第4連隊本部 1945: 6〕。米軍は、「レッド2」の後方に、対戦車壕が掘られていると予測していた。また、「レッド3」に沿岸砲の砲座がある（米軍の写真撮影時点では砲はない）ことも予測していた（「アイスバーグ目標」）。

「第62師団戦闘経過要図」は、同地に守備隊を記していない。ただし、第62師団（の独立歩兵第12大隊）の隷下の部隊がいなかっただけで、第56飛行場大隊や第503特設警備工兵隊の将兵・防衛隊員が残っていた可能性がある。これらの隊は、北飛行場を破壊して、220高地（喜名北東）に避退するよう命じられていた。だが、北飛行場は、特攻機の中継基地として使われ続け、破壊は遅れていた²¹⁾。そして、先に記したように、4月1日の段階でも、トーガー周辺に大隊本部や後方部隊が残っていた。

第4海兵連隊第1大隊のレポートには、上陸時に「レッド3」で軽機関銃に撃たれたという記載がある〔海兵第4連隊第1大隊 1945: 7〕。また、第3大隊のレポートでも、跳弾による1人の死体が浮いていたとされている〔海兵第4連隊第3大隊 1945: 4〕。これらが自軍の誤射によるものでなければ、海辺から飛行場に多少の日本兵が残っていたことになる²²⁾。

上陸を終えた第3大隊と第1大隊は、10時30分から、飛行場がある「ハイグラウンド」に向かった。米軍は、飛行場の南麓に、幾つかの砲台の存在を予測しており（「アイスバーグ目標」）、警戒しながら進んだはずである。だが、日本軍の反撃はなく²³⁾、飛行場を縦断し、13時に東端に達した〔海兵第4連隊本部 1945: 7〕。その後、14-15時に第2大隊が上陸した〔海兵第4連隊第2大隊 1945: 5; Nichols and Shaw 1955: 68〕。Okinawaによると、左手（つまり第3大隊の後ろ）に向かったという〔Nichols and Shaw 1955: 68〕。

ところで、午前中に上陸した第3大隊の一部は、第22海兵連隊の担当地域との境にある都屋に向かい、集落を制圧した〔海兵第4連隊第3大隊 1945: 4〕。都屋の海岸にはトーチカがあったが（「アイスバーグ目標」，〔読谷村史編集室 2004: 41-42〕），日本兵はそこを放棄し、付近のティラガマに籠っていた。米軍の上陸後は、付近の他のガマに隠れていたという〔読谷村字都屋字誌編集委員会 1998: 244〕。「第62師団戦闘経過要図」は、都屋に日本兵を記していないので、彼らは飛行場大隊か特別警備工兵隊の将兵だろう。

米軍が、4月1日の段階で、この日本兵に気づいていたかどうか、集落をどう「掃討」したのかは情報がない。先に見たように、「捕虜一覧表」は、1日に16人の住民が捕虜になったとしているが（『戦時記録』下: 245）、「都屋」には、都屋集落の中での事例は見当たらない。米軍は、1日には住民の存在を認識せず、ほぼ無人だと考えたのではなかろうか。そして、都屋に、すぐにキャンプをつくり、シムクガマなどで捕虜にした住民を連れて来た〔第6海兵師団司令部 1945: VII -45〕。

② 北飛行場の完全占領

その後、左手から北飛行場を進む第4海兵連隊第3大隊は、13時30分に軽い抵抗にあい、戦車を呼ぶことにした[Nichols and Shaw 1955: 68]。そして、座喜味城跡の真南で、波平で停止していたB中隊、及び、「レッド3」に9時30分に上陸していたC中隊と合流した[戦車第6大隊 1945: 15]。C中隊は、日本軍の抵抗が弱く、戦車が不要とされたため、この時まで待機していた。ただ、出動したものの、B中隊は城跡への道が険しくて進めず、16時までに整備に戻った。C中隊も、有力な敵がいなかったため、同様に帰還した。

さて、第3大隊は、先に記したように、夕方以後、座喜味城跡の南東麓で日本軍と近接戦闘を交えた。「第4海兵連隊第3大隊レポート」は、丘でも日本軍の散発的な抵抗があったと書いている[海兵第4連隊第3大隊 1945: 4]。同レポートでは明記されていないが、戦車第6大隊のレポートからして[戦車第6大隊 1946: 15]、城跡に向かったのは確実である。

一方、右手から飛行場を進んだ第1大隊には、このような交戦の機会はなかった。その代わり、暗くなってすぐ、1機の“ZEKE”(零戦)が飛行場に着陸するのに遭遇した[海兵第4連隊第1大隊 1945: 7]。同機は地上を走って大隊本部に迫ったが、米兵たちは、脱出したパイロットを小銃で「穴だらけ」にしたという。この件に触れたアメリカ側のルポは幾つかある²⁴⁾。ただし、管見では、日本側の史料と突き合わせ、実否を問うようなものはなかった。

それでも、着陸の事実はあったと言える。公刊戦史『沖縄・台湾 硫黄島方面 陸軍航空作戦』は、16時20分に新田原(宮崎県)を出撃した特攻隊・誠第39飛行隊の、次のような動きを記している。同隊は6機の一式戦闘機(隼)で編制されており、19時10分頃に、読谷・嘉手納沖の輸送船団を自爆攻撃した。その中の内村重二軍曹の乗機は、戦果を確認し、沖縄の海軍飛行場(小禄)に降り立つことを命じられていた²⁵⁾。それが、場所を誤認したか、既に北飛行場が制圧されていることを認識できないまま、降着したものと見られる。内村が乗ったのは一式戦闘機だが、零戦と大きさや形状が似ており、米軍は誤認したことになる。

この時、第1大隊は、日本軍の夜襲に備えて塹壕を掘りつつあった。実際、夜間に、何組かの日本兵と遭遇したという[第4海兵連隊第1大隊 1945: 7]。彼らは、第56飛行場大隊などが送った「斬り込み隊」だった。ただ、指揮を任された補給中隊長の紫雲直道中尉によると、米軍の照明に妨げられ、2日の早朝に喜名の北東方面(163高地など)に引き揚げたという²⁶⁾。

5. まとめに代えて

以上、1945年4月1日の読谷村北西部(第6海兵師団担当地域とその周辺)の様相を見た。第6海兵師団の諸部隊と日本側の情報を突き合わせ、同日の軍と住民の様子を掘り下げた。そのことで、村の北西部に限定されたものではあるが、読谷という1個の「戦争遺跡」の様相をより明瞭にした。上陸した米軍は、シムクガマやチビチリガマだけでなく、各集落にも侵入した。そして、銃を撃ちながら、壕や物陰に隠れた住民を、次々に捕虜にしていっていった。日本軍は、この地区に全くいなかったわけではなく、特に夕方以後、座喜味城跡南麓で百人以上がまとまって抵抗し、全滅した。読谷村(北西部)が地上戦の舞台だったことを、改めて認識できる。

ところで、第6海兵師団は、4月1日に700人の住民を収容したと報じている[第6海兵師団司令

部 1945: VII -45]。同師団の担当範囲からして、これは、シムクガマや、波平とその周辺（高志保・座喜味・都屋など）で収容した人数だということになる。

このうちシムクガマについて、「捕虜一覧表」は 4 月 1 日に 410 人が捕虜になったとしている。調査時に 4 月 1 日と断定されなかった者（「4 月とだけ記載があるもの」「月日の記載がないもの」に区分されている）にも、同日の捕虜が含まれているはずであり、実数はもう少し多かったことになる。また、本稿で見た家族壕などでの捕虜は、合算すると 200-230 人前後になる。他に、イングェーガマやアガリシムクで捕虜になった者や、4 月 1 日と特定するのを避けた者もあり、それらを足していくと、確かに 700 人前後になりそうである。第 6 海兵師団担当地区の 4 月 1 日の捕虜は、700 人を基本イメージとしてもよいのではなかろうか。

それから、死者については、特に単身者や全滅した家族について不明な点が多く、まだ確定的なことは言えない。その代わり、従来あまり注目されなかった負傷者について、次のことを指摘したい。波平や座喜味で見たように、負傷した住民も多かった。「第 22 海兵連隊第 3 大隊レポート」[海兵第 22 連隊第 3 大隊 1945: 19, 23] も、同大隊が最初期（4 月 20 日頃まで）の戦闘で、100 人の住民を（医療が必要という意味で）緊急に収容したとしている。また、4 月 1 日に捕虜にした住民のうち、その日のうちに 2 人が死亡したとしている。捕虜になった住民は無傷ではなく、衰弱したり傷ついた者も多かったのである。また、「第 29 海兵連隊本部レポート」も、21 日までに 250 人の市民に応急措置を施したとしている[第 29 海兵連隊 1945: 3]。その際、第 1 大隊は 47 人という数字をあげているが[第 29 海兵連隊第 1 大隊 1945: 14]、これは本部のレポート外の数字のようである²⁷⁾。このような負傷の件については、4 月 1 日だけに限定せず、もう少し長期間の様子を点検し、改めて総括したい。

もう 1 点、米軍による住民殺傷の 1 つの類型として、夜間移動時の狙撃があったことを指摘しておく。3 では、波平・座喜味などでの具体的な事例を示した。1-2 日に高志保・波平を警戒した第 29 海兵連隊第 1 大隊も、4 月 20 日頃までの戦闘を総括する中で、砲撃と夜間の銃撃で、住民に夥しい死者が出たとしている[第 29 海兵連隊第 1 大隊 1945: 14]。第 4 海兵連隊本部も、5 月 1 日付けで、進路にビラを撒いて、市民に次のことを伝える提案をしている。その 1 つは、夜に動かないことである（もう 1 つは、日本兵に似た服を着ないこと）[第 4 海兵連隊本部 1945: 37]。この件についても、もう少し長期間の様子を調査し、改めて総括したい。

注

- 1) 同書は 1948 年にアメリカで刊行され、外間正四郎が 1968 年に『日米最後の戦闘』[米国陸軍省 1968] として部分的に日本語訳した。その後、外間は 1997 年の光人社版で増補し、2011 年には喜名健勇が訳本を刊行した。
- 2) 同記録の史料情報については、等雄一郎の論稿を参照[2000]。なお、第 1 海兵師団のレポートのうち、浦添市立図書館所蔵分は、『極秘 アメリカ第 1 海兵師団沖縄特別作戦報告書』として刊行されている[アメリカ軍第 1 海兵師団 2006]。
- 3) 「改製原戸籍」「除籍簿」などから追加された者が多い。
- 4) この地図は、『平和の炎：8 号』[読谷村総務部企画課 1995: 87] で紹介され、『戦時記録』上でも表紙裏にプリントされている。

- 5) なお、『沖縄地理』に掲載された渡辺康志・与那覇里子の論稿は、読谷村内での住民の死者の分布に言及している [2015]。ただ、①先行研究と異なり、死者に限定した話である上、②資料の吟味に力を入れておらず、③従って、作成した GIS に精度・信頼性の問題がある。また、④字内で任意にプロットしたことで、不正確さが増幅されている。⑤それに、先行研究について、「沖縄戦当時の資料や記憶・証言などから記述する域を出ず、空間分析という視点ではまとめられていない」と言い切っているが [12]、実際には、『戦時記録』下が地域・時期ごとに詳しい説明を付け、相互の比較もしている [217-228 など]。このように問題が多いため、本稿は同稿を継承する形をとらない。また、本稿は軍民関係を一步步見定めていこうとするものであり、林 [2001] や照屋 [2013] を直接に継承する形もとらない。
- 6) これらの浜辺の名称は、米軍によるものだが、わかりやすいので本稿でも便宜的に使用する。
- 7) JACAR (アジア歴史資料センター) データベース、記号はレファレンスコードを表す。
- 8) [Homan Lacey 2005: 47]。他に、*Okinawa* [Nichols and Shaw 1955: 67] も、“no opposition” と記している。
- 9) [谷田 1974: 9-10, 付図 1]。谷田はこの記事を、北原の後任の森尾勇准尉に取材して記しており、信憑性は高い。沖縄タイムス社『鉄の暴風』にも、小隊が波平海岸から命からがら退却したこと、飛行場大隊と連携していなかったことなど、ニュアンスが重なる記事がある [1978: 67]。公刊戦史は、小隊が「座喜味地区」で戦ったように記しているが [防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 274]、場所はややズレていたことになる。
- 10) 『戦時記録』上: 461。「儀間」「波平 1-2」には、4 月 1 日にイングエーガマで捕虜になったという M 一家 (5 人)、O 一家 (7 人か)、O 一家 (6 人か)、M 一家 (5 人)、U 一家 (4 人)、2 日に捕虜になったという H 一家 (2 人)、Y 一家 (2 人) の情報が載っている。1 日の午後 2 時頃に、逃げようと壕を出たところ、捕虜になったという記述もあり、これらの情報が間違いでなければ、米兵が 1 日のうちに奥まで侵入したわけではなかったことになる。
- 11) 高志保の北端に住んでいた比嘉武治らは、米軍が西の畑の方から並んで近づいてくるのを見たという [高志保字誌編集委員会 2007: 779]。また、*Okinawa* は、第 22 海兵連隊が (全体として) 波平に向かったとしている [Nichols and Shaw 1955: 67]。これらのことからすると、第 2 大隊は、チビチリガマから真っ直ぐ高志保に向かい、そこから南下して波平に向かったことになる。
- 12) [第 6 海兵師団司令部 1945: VII -1; 第 22 海兵連隊本部 1945: 9; Nichols and Shaw 1955: 68]。なお、「海兵第 29 連隊本部レポート」[海兵第 29 連隊本部 1945: 1]「海兵第 29 連隊第 1 大隊レポート」[海兵第 29 連隊本部 1945: 8] は、「グリーン 2」に上陸したとしているが、距離から考えて誤記だろう。
- 13) 『戦時記録』下: 245。「渡ヶ次 1-3」でも、渡慶次に残った住民は、ほぼ一律に 4 月上旬に捕虜になったとされている。
- 14) [1992: 458-459]。「波平 1」には、この時に 50 代の女性が死んだことが記されている。
- 15) 『戦時記録』上は約 20 人とし [142]、『読谷村の戦跡めぐり』は約 60 人 [読谷村史編集室 2004: 40]、『沖縄・チビチリガマの“集団自決”』は 80 人あまりとしている [下嶋 1992: 22]。「波平 3-4」からは、M 一家 (7 人か)、M 一家 (3 人) が捕虜になったことが読み取れる。
- 16) 『鉄の暴風』も、「北方高地」の日本軍が、対戦車砲を撃ったとしている [沖縄タイムス社 1978: 68]。ただ、隊の編制からして、実際には擲弾筒だろう。
- 17) 攻撃を受けたのが、城跡に向かわないで東進した「Item 中隊」であり、しかも第 4 海兵連隊第 3

大隊の持ち場でのことなので〔海兵第 22 連隊第 3 大隊 1945: 8〕、南東麓でのことと考えられる。

- 18) 〔第 22 海兵連隊第 3 大隊 1945: 8〕。なお、「海兵第 22 連隊本部レポート」は、17 時としている〔海兵第 22 連隊本部 1945: 8〕。
- 19) この事件には、歴史学者の林博史らも注目し、チビチリガマのような「集団自決」が、特殊事例ではなかった証拠の 1 つとしている〔林 2009: 54〕。
- 20) この件は、『字誌 高志保：下巻』に掲載された、知花信雄の一家（8 人）に対応するようである〔高志保字誌編集委員会 2007: 767〕。
- 21) 『沖縄方面陸軍作戦』〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 282〕によると、1945 年 4 月 1 日 18 時 30 分の球参電第 926 号で、3 月 31 日に「爆破破壊」した報告があったという。もっとも、4 月 2 日の午後に米航空隊が進出していることから〔第 6 海兵師団司令部 1945: VII -2〕、爆破は不完全だったことになる。
- 22) 松本仁一『兵隊先生』には、滑走路の南端の見張り所（小さい穴の上に丸太を渡し、土嚢・草を乗せたもの）〔2012: 22-24〕で米軍の上陸を目撃した松本康男兵長（誠第 1 整備中隊）の話が出てくる。同書は、康男から聞いた話をもとに、甥（養子）の仁一がまとめたものであり、飛行場周辺の様相の一端が窺える。また、軍属の伊波政仁も、飛行機を焼き払いに行き、燃やしきらないうちに敵が来たので逃げたとしている〔伊波政仁 2004: 237〕。
- 23) ただし、*Okinawa* は、散発的に発砲されたと記している〔Nichols and Shaw 1955: 68〕。
- 24) 〔Morison 1961: 171; ロバート・レッキー 1963: 252; ジョージ・ファイファー 1995: 242〕。なお、「第 6 工兵大隊レポート」にも、着陸し、出てきたパイロットが狙撃されて倒されたという記事がある〔第 6 工兵大隊 1945: VII -1〕。日本側でも、浜松昭『沖縄戦こぼれ話』〔1990: 91-92〕などが言及している。
- 25) 〔防衛庁防衛研修所戦史室 1970: 438-439〕。なお、『陸軍航空特別攻撃隊史』〔生出 1977: 181, 293〕や『特別攻撃隊全史』〔特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会 2008: 290〕は、この時に死んだ 6 人のフルネームを記している。
- 26) 〔防衛庁防衛研修所戦史室 1968a: 275〕。元防衛隊員の座喜味和則の回想からすると、斬り込み隊の人数は 100 人を超え、退却路も一様ではなかったことになる〔座喜味 2001: 138〕。先の『兵隊先生』にも、松本兵長が、整備中隊から抽出された斬り込み隊を率いる件が載っている〔松本 2012: 29-33〕。彼らの退却路も、紫雲・座喜味のものと異なっている。
- 27) 他にも、最初期の戦闘について、「第 22 連隊本部レポート」は、負傷した 50 人の住民を保護したとしており〔第 22 連隊本部 1945: 22〕、「第 22 連隊第 1 大隊レポート」は、銃創を負った 20 人の住民に応急処置を施したとしている〔第 22 連隊第 1 大隊 1945: 15〕。